

玉村豊男著「種まく人 - ヴィラデスト物語 - 」新潮文庫、新潮社 1998年12月1日刊を読む

種まく人とは

朝は早く起き、涼しいうちに外の仕事をし、太陽が熱くなったら中に引込んで昼寝をする。日射しが弱まったらまた外に出、暗くなるまで畑で過ごす。

春から秋までは、土曜も日曜もなく同じような毎日を繰り返すが、ことに太陽がいつまでも天にいる夏の頃の、午後6時過ぎの一刻はなにものにも代え難い。

その時刻、ようやく日中の熱気が地に墮ちて、汗をかいた肌に優しい風が吹きはじめる。

鳥の声が聞こえる。

そのほかに、ほとんど物音はしない。

かすかに耳を澄ませると気がつくのは、どこか山の下のほうから上がってくる、遠い犬の声、ときに、子供の声。私の仕事の手を止めて、じいっとその静けさに聞き入ってしまう。たしか、昔、こんな感覚の中にいた記憶がある……。

森や、山や、畑が、薄明の中に沈もうとしている、夜と昼が翼を触れ合わせながら入れ替わる瞬間、私はいつも、懐かしさで胸がいっぱいになったような、言いようのない至福感を覚えるのだ。

きょうも、一日が終わろうとしている。

暗くなって、足もと覚束なくなる頃、農具を抱えて、重い足取りでようやく畑から帰ってくる。からだは泥のように疲れているが、満ち足りた心をもって。

どんな疲労にも、徒労というものはない。

なにかを犠牲にしてまでやり遂げる価値のあることなどなにもあるまいが、かといって、どんなささいなことにも、それなりのやるべき価値はあるものだ。

日がな一日雑草取りに時間を費したとしても、損もしないし、得もしない。

雑草は生え、抜かれ、また生える。

それは、私たちが生まれてくる前に長い長い無辺際な時間があり、私たちが死んだあとにまた無辺際な時間が永遠に続くのに似ている。

ただ、そうして、一日を過ごす(やるべきことがあってそれをやる、終わらなくてもよいができるところまでやる)ことしたいが重要であり、人生とはそうして与えられた時間を死ぬまで過ごすことなのかもしれないと、漠然とだが、しだいに私は考えるようになってきている。これも、農という営みの^{くどく}功德、だろうか。

三年ほど土を這っているうちに、だいぶ肉体の力もついてきた。

不自然な姿勢を長時間続けると腰に痛みのくることはあるが、草刈りにしても、畝立てにしても、はじめの頃とは違ってずいぶん長いこと持続して作業ができるようになった。徒労感がなくなったのは、そこにもひとつの理由があるだろう。

土や植物と深くかかると人はたいがい哲学者か宗教家になるものだが、私が結果はともかく過程さえ楽しければよいと思うようになったのは、肉体を動かすという麻薬の力にからめとられて、しだいにものこを深く考えなくなったせいかもしれない。それでいいのだ。生活はなるべく単純なほうがいい。

一時夢想した隠遁生活はまだ実現していないが、農園としてのヴィラデストはいちおう順調にスタートした。経営の必要のためにあちこちを飛び歩かなければならない状態は当分続くとしても、てぎるかぎり私はここに、この場所に、いたい。ここが、私の、宇宙なのだから。

2 . 六月。

田んぼに水が入る。

ちょうど新月の晩に、村の集会所で寄り合いがあった。

村の人たちとも、適当に折り合いをつけて暮らしている。どこで暮らしたとしても、時間が経つうちに必要な分だけ変わるものが変わり、変わらないものは変わらないまま残るものだ。その日はちょっとした伝達事項があっただけで集まりはすぐに終わり、それぞれの家に戻る村人と別れて、ひとり、暗い夜道を山のほうに向かった。

闇の中に、カエルの声だけが響いていた。

田に水が入ると、待ってましたとばかりにカエルが啼きはじめる。いったいそれまではどこにいたのか、どうして急に大発生するかのようにならわれるのか、まったく不思議なのだが、ある日、静かだった夜に突然カエルの合唱が鳴りひびき、その声を聞いて今年も米づくりの季節が来たことを知るのである。

水の張られた田という田のすべてに夥しい数のカエルがあらわれて、草の陰で、葉の上で、畦のわきで、のどを震わせながら歓喜の歌を歌っているのだ。合唱はときに同調して強くなり、いつときやや静まって、再びまた盛り上がりながら、夜更けまで続く。

新月といっても、星も少しだけ出ている。雨は近いが、まだ降り出すには間があるようだ。そのわずかに明るい夜の空が黒い森の樹のあいだを細長く続いていて、上を向いてそれをたどっていけば、下にある道を踏み外すことはない。

森の中の道は、それほど長くない。

ゆっくり歩いて5分ものぼれば道は大きく左に曲がって、ブドウ畑の斜面の上に出ることになる。そこまで行けば視界も開けて、我が家の灯も目に入る。

3 .

曲がり角を曲がると、私の家の灯が見えた。

私はそこで立ち止まり、大きな息をひとつ吐いて、それから、しだいに遠ざかるカエルたちの合唱を背に、私の家と農園のあるヴィラデストの山のほうへ、ゆっくりと歩き出した。

[コメント]

軽井沢での7年間の田舎暮らしの後に、長野県東部町に広大な農園を擁する「ヴィラデスト」を開き、晴耕雨読の生活を始めたコラムニスト玉村豊男氏の生き方は興味深い。「自然と精神」に価値をおいた豊かな人生とは何か考えるときに参考になる。

- 2009年9月11日 林明夫記 -